ノーブレス オブリージュ
Noblesse oblige

～貴き者の責務～ 日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第七回

作家 高崎哲郎

内村鑑三の教え、横浜正金銀行入社、海外への飛翔

加納久朗には、学習院中等科（旧制中学校に相当）の学生時代に宿命的な出会いがあった。無教会主義キリスト教指導者内村鑑三（1861‐1930）との巡り合いである。久朗は内村の唱導するキリスト教の信者となった。宗教哲学者・社会評論家内村鑑三の門下生となった、というほうが正しい。内村の講演に心を揺さぶられた才知ある青年は、生涯「内村イズム」から離れることはなかった。久朗は、その間の経緯を熱意を込めて『回想の内村鑑三』（鈴木俊郎編）に投稿している。執筆当時久朗は60歳代後半であった。（以下原文のママ）

「　内村先生　　加納久朗

私は今年初め参議院選挙に出た（昭和29年（1954））。それで落選した。選挙の当時千葉新聞は4人の候補に『自分の尊敬する人物』を問合わせた。私は『内村鑑三』と書いた。その為め一人の老年があらわれ、『お前は内村先生を師事するか、それならわしはお前に票を入れる』と云うてくれた。少く共1票はかせいだ。内村先生は此汚れた日本に未だ生きて居る、否、これからまだ広く生きられるであろう」

「私は明治34年頃（今日の高校生の年齢）、大森に住んで居た。大森から通学の途次警醒社書店主人福永氏に知り合いになった。警醒社では私は内村先生の本をよく買って居たので、ある日福永さんは自宅で内村先生の聖書の研究会をやるから来ないかと誘われた。自分の胸はおどった。どんな先生だろう、どんな話をされるだろうと楽しみにして出掛けた。30人ばかりの人は畳の上に坐った。先生は椅子にかけて話された。どんなお話だったか記憶せぬ。しかしライオンがほえる様な感が有った。その日私の宅で私の両親兄弟妹などと一所に食事をした。私の父（久宜）が農村改良、信用組合に熱心に働いて居ったので、先生と大に共鳴して話して居た。私はあんなにうれしい日はなかった。（警醒社は日本のプロテスタント系の最初の超教派の出版社で、内村鑑三の著作も出版している）

「その後、私の大森の宅や郷里千葉県一宮町の婦人会・青年会に来て戴いて先生の御話を伺った。其都度ピシピシと胸を打った。あの御話は小冊子にして発行した。『ニコライ師の話』『どうしたら楽に死ねるか』等、それである。

私は『聖書之研究』（内村創刊の機関誌）を70号から読み始めたので1号から揃えて書斎に置いた。私の海外生活25年、其間先生のおなくなりになる迄『聖書之研究』を購読した。あれ程自分を教えたものは無い。

第二次大戦に敗れた時自分は『興国史談』を思出して一読した。そして先生の預言者的大存在であることの深くした」

「ある時私は先生に『ヨハネの黙示録は難解ですね』と申上げた処、先生は『あれは世の苦労と困難を身に体験したもののみよくわかる』と返事された。自分の至らぬことをはじた。

ルツ子さん（内村愛娘）の御葬儀の時に先生は天真爛漫に振舞われた。最後の棺を閉づる時先生は『グッドバイ、グッドバイ』と云われた。そして『此子が生れた時は自分は貧乏のどん底に居た、今日こんなに大勢の人々から世話され幸福に天国に行くのは幸せだ』と叫ばれた。

先生の事は書けばいくらもある。ただ一と言、先生は今日の日本に未だ生きて居る、生かさねばならぬ」

◇　◇

内村の唱導した無教会主義とは、どんな教えなのか、どんな実践をするのか、既存のキリスト教の信仰とどう違うのか、そして久朗はなぜその教えを生涯守り通したのか。（以下、内村の直弟子である矢内原忠雄東大元総長の著作を参考にする）。無教会主義とは、人は教会員（教会で洗礼を受けた信者）にならなくてもキリスト教徒たりえるという主張である。教会の伝承によると、有資格の牧師から洗礼を授けられることによって正式に教会の会員となり、それで「求道者」から「信者」に昇格して、クリスチャンであることが公認される。従って教会員でないクリスチャンはありえず、「教会の外に救いなし」というのが教会側の主張である。これに対して、人はキリストを信じることによってクリスチャンとなるのであり、そのためには信仰だけで必要かつ十分であり、それ以外なんの制度的または儀礼的な条件を必要としない。その意味から洗礼を受けることも必要ではなく教会員となるにも及ばない、と主張するのが無教会主義である。

内村鑑三肖像画
（アメリカ・アマスト大学※図書館蔵、筆者撮影）

「教会が伝承と制度とを重んじるのに対し、無教会が自由と生命とを重んじるのは明白である」と矢内原元総長は強調する。さらに矢内原は「内村鑑三は教会破壊者として現われたのではなく、教会改革者として立ったのでもありません。彼は教会の外に立ってキリストの福音を説いたに過ぎない」と断言する。無教会主義によって、人は教会という制度から全く自由となり、神と信者との間に何らの中間的権威を認めず、各自が直接神に結合する自由人となった、と内村は唱えた。（拙書『技師青山士　その精神の軌跡』参照）。久朗は、内村の教えを心の柱とした敬虔なクリスチャンであった。その精神は「民衆への愛と奉仕」、「社会正義」、「非戦思想」である。「全て深遠なるものは詩的なり」（内村鑑三「ヨブ記研究」）。久朗はこの内村のことばも終生愛した。

◇　◇

明治45年（1912）3月7日、内村鑑三は久宜に招かれ、大森倶楽部で講演した。内村は当時50歳、久宜は63歳で一宮町長に就任直後であった。同クラブは大森地区及び周辺の知識人・文化人の交流の場であり、久宜はクラブ運営の責任者の一人だった。久宜は内村を自邸（東京府入新井村、現東京都大田区山王3丁目）に招待し食事をともにした後、大森倶楽部で講演してもらった。その日は大森倶楽部の創立記念日でもあった。内村の演題は「基督教と其信仰～イエスを友とするに外ならず～」で、講演内容は「聖書之研究」（第141号）に「大森にて」と題して掲載された。（現代語表記とする）。

「基督教が何であるかは、不信者のみならず信者にも度々起る問題である。基督教はキリストと唱えられしナザレのイエスである、しかして基督教を信ずるとはイエスを友とすることである。いたって単純である。別に難しい事ではない、教会に入るとか教義を探るとか云うことは基督教に入るための必要条件ではない。

イエスを友として基督教に関するすべての事は判るのである、イエスさえ判れば其れで基督教は悉く判るのである。

イエスを友とする前に勿論彼に就いて知る必要がある。しかしてイエスに就いて詳しく我等に告げる者は聖書である。ここに於いてか聖書研究の必要が起るのである。聖書、殊に新約聖書はイエスの伝記である、彼をすべての方面より伝えんとした者、それが新約聖書である。故に聖書を読まずしてイエスは判らない、従って基督教は判らない、聖書の研究をなおざりにして基督教を語るは天を仰がずして天文を語ると同然である、しかもかかる事は無い事ではない」

「イエスを友としてのみ人は歓喜と希望とを以て死ぬことが出来るのである、死は小事ではない、大事である、死は少数の不幸者にのみ臨む事ではない、何人にも来る事である。人は何人も平安を以て死を迎うるの準備を為すの必要がある、彼は単独で死の河を渡らなければならない、其時医師も牧師も彼に何の用をも為さない、又哲学も宗教も彼の援助とは成らない、死の河を渡る時の唯一の伴侶、唯一の慰藉者はイエスである、彼に携えられて死の旅行は寂寥ないのである、イエスのみが現世と來世とに跨る友人である、此の人のみが無限の大海に乗出す時の唯一の水先案内である。

実に人の生涯に取りイエスを知り彼を友とする程大切なことはない、しかして是れ難いようで至って易い事である、基督教を信じ基督教会に入ると云えば至って困難ようであるが、然しイエスを友とすることは何人にも為

※ニューイングランドの名門大学
内村は同校に留学した

し得ることである、しかして彼と友誼を続ければ続けるほど彼に就いて深い事が段々と判つて来り、別に宗教や神学を研究すると云うにあらずと雖も、人生の奥義が段々と彼に由って示さるるのである。…（以下略）」

誰もが死ぬが、イエスを友にすれば恐れることはない、と内村は力説した。講演の2か月ほど前の1月12日、内村は身内の死に直面した。愛娘のルツ子を病で亡くしたのである。内村の悲しみは深かった。当時の書簡には「私たちは今も悲しんでおり、わが子を失って泣き叫ぶ母ラケル（Rachel）の心は慰められることを拒みます」（明治45年1月24日・アメリカの友人ベル宛英文書翰）とある。内村は悲しみを信仰で乗り越える。内村はルツ子の葬儀の際「ルツ子さん、万歳」と叫んだ。大森倶楽部で講演した内村は「死」に言及した。彼にとって「死」は実に生々しい現実だった。これらの事実を父久宜と子息久朗は熟知していた。それだけに講演の結びの言葉に烈しく打たれたのである。

青年時代の久朗が心に刻んだ内村の言葉に「2つのJ」がある。

「私共に取りましては愛すべき名として天上天下唯二つあるのみであります。其一つがイエスでありまして其他の者は日本であります。是を英語で申しますれば、其第一はJesusでありまして、其第二はJapanであります。二つともJの字をもって始まって居りますから、私は之を称してTwo Js即ち二つのJの字と申します」（『内村鑑三全集第14巻』）。「2つのJ」の教えは彼の海外勤務において一層重要性を増すのである。

◇　◇　◇

久朗は、明治44年7月、東京帝国大学を卒業し翌年10月横浜正金銀行に入社した。東京帝大法科卒の幹部候補生（エリート）である。これより前の同年5月次男久次※が誕生した。久次は後に中村家の養子となる。横浜正金銀行は戦前日本を代表する世界的外国為替銀行であった。彼は自己の人生の半数近く（34年間）を同行に捧げるのである。しかも、その大半（25年間）を海外支店勤務で活躍する国際派銀行マンであった。同行は戦後間もなく役割を終えて閉店し、東京銀行を経て今日三菱東京UFJ銀行となっている。戦前日本銀行と肩を並べた横浜正金銀行は、今日存在を忘れられている。創設から久朗入社頃までの同社の歩みを確認する。『横浜正金銀行全史』、『横浜正金銀行』（土方晋）などを参考にする。

横浜正金銀行初任給（大正元年11月、一宮町教委「加納家史料」）

〈横浜正金銀行の誕生〉

文明開化期の明治12年（1879）11月、中村道太（1836-1921、三河吉田藩士・幕臣、後に横浜正金銀行初代頭取）ほか22人が発起人となり、横浜、神戸などの開港場で正金（英語specieの和訳で紙幣に対する正貨）すなわち正銀の運用供給により、外国銀行に対抗して日本商人の貿易発達を目的とした正金銀行が創立された。国立銀行条例に準拠した資本金300万円の一大銀行であり、銀行紙幣発行の特権を除いて大蔵省の許可を得て、翌13年2月28日、国際港湾都市への飛躍が約束された横浜の中心街に開業した。明治15年、日本銀行が開業した。18年に兌換銀行券を発行し、19年から政府紙幣の銀貨兌換をしており、横浜正金銀行はこの兌換銀貨の海外からの蓄積に貢献した。

明治17年東洋銀行破産のため、従来同行が扱っていた日本政府外国債の元利払や官金受払については正金ロンドン支店が政府委託銀行となった。以後正金がすべて政府、日銀の対外関係を受託したので正金の地位は著しく向上した。国内支店は神戸（明治13年）のみで、海外店は、ニューヨーク（同13年、後年久朗勤務）、ロンドン（同14年、後年久朗勤務）、リヨン（同15年）、サンフランシスコ（同19年）であった。

同20年（1887）7月、政府は勅令第29号により横浜正金銀行条例を制定し、公布した。明治13年設立の際は国立銀行条例（ただし兌換銀行券発行の項を除く）に準拠したのであるが、同行が日本有数の銀行となり、外国関係の業務がますます盛んになった。そこで政府は特殊銀行である性質を明確にするため、特に条例を制定したのである。

〈金本位制成立〉

明治30年（1887）、金0・75gを1円とする貨幣法が公布され、日本の金本位制は確立した。償金の保管、回収、運用により正金の地位はさらに向上し、英蘭銀行は正金の預金勘定開設を快諾した。店舗増設は、国内店は東京、長崎（いずれも明治32年）であり、海外店はホノルル（同25年）、上海（同26年）、ボンベイ（同27年、後年久朗勤務）、香港（同30年）、天津（同32年）、牛荘（営口）（同33年）であった。

旧横浜正金銀行本店（現神奈川県立歴史博物館）

〈近代建築を代表する本社社屋〉

横浜正金銀行本店の壮麗な建物は今日もなお威容を誇って国際都市横浜市の中心街に立っている。本社社屋は地上3階建て地下1階の見上げるようなあたりを払う堂々たる洋風建築で、建坪652坪2合（1坪3・3㎡）、軒高54尺5寸（1尺33㎝、1寸3・03㎝）、ドームの尖頭まで119尺（約40m）もある。その概要は、設計：工学博士妻木頼黄（1859-1916）、工事：明治32年3月25日に地盤工事着手、同年12月13日本館建築着工、同37年7月竣工。ドイツ・ゴチック様式。工費：110万円（当時）。現在：神奈川県立歴史博物館、昭和44年3月、国指定重要文化財。施工は「概して常備職工を用いて直接に経営し特に分業請負を利便とするものに限り其専門当業者をして之を請負わしむるの方法を採りたり」（『横浜正金銀行建築要覧』）とあることから直営の事業であった。基本的には碇聯鉄骨レンガ造りである。碇聯鉄骨法とは、レンガ積みの壁補強材として横方向に鉄材を配筋し、垂直方向の主要部分に鉄柱を建て耐震性を向上させる当時としては最先端の工法である。屋根は銅板葺きで荘重なイメージを高めている。設計者の妻木頼黄は幕府旗本の家筋生まれで、政府営繕組織の基礎を築いた明治建築界の偉才の一人として知られる。横浜正金銀行本店や横浜赤レンガ倉庫などが現存する代表作である。

〈日露戦争の外債募集と清国進出〉

明治33年（1900）には、横浜正金銀行は第3回目倍額増資の半額払込により、払込資金が1800万円となり、当時の三井、三菱、安田、住友、第一の5大銀行の合計資本金を上回る日本最大の資本を有する銀行となった。日露戦争中より正金は大連（関東州、後年久朗勤務）、奉天等満州（現中国東北地方）各地に支店・出張所を開設し、対清貿易金融を行った。同39年（1906）勅令第247号により、関東州及び清国において正金の銀行券に関する勅令が公布施行され、清国各地において銀行券を発行し得ることになった。すでに満州、上海、天津等で発行したものもこの勅令の下で発行したものとみなされることになった。正金銀行券は関東州及び清国における公私一切の取引に無制限に通用する法貨の効力を持つのである。

〈第一次世界大戦と巨額買持〉

大正4年（1914）8月、第一次世界大戦が勃発し、日本も対独宣戦した。日本は戦闘の局外にあり、もっぱら物資補給の立場にあったので、同8年（1919）までの5年間は貿易の飛躍時代であった。横浜正金銀行の海外支店網も拡大する一方だった。北京（後年久朗勤務）、漢口、大連（後年久朗勤務）、奉天、長春、カルカッタ（後年久朗勤務）などに増設し、明治末年の久朗入社時には20店に達していた。第一次世界大戦前後にかけて、青島、シンガポール、スラバヤ、バタビア（現ジャカルタ）、マニラ、ラングーン、シドニー、シアトル、ブエノスアイレス、リオデジャネイロの各店を開設、全店30店にも達し世界的為替銀行となった。大正9年の第5回増資により、資本金1億円という日本最大の資本金を有する銀行となり、香港上海銀行やチャータード銀行（後半からナショナルシティ銀行が代わる）と共に世界3大為替銀行と言われたのも、この頃からである。久朗は大阪支店勤務の後大正3年大連支店勤務となった。妻多津と子どもたちを連れて中国大陸に渡る。第一次世界大戦の最中であった。海外への飛翔の始まりである。（大正2年8月長女多恵子誕生、後に山之内三郎夫人）。

（参考文献：千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」、『加納久宜集』（松尾れい子編）、『横浜正金銀行全史』、『横浜正金銀行』（神奈川県立歴史博物館）、『横浜正金銀行』（土方晋）、横浜市立図書館資料、伊藤恵子様（ロンドン在住）提供文献など）。

（つづく）。

※次男久次は京都帝大理学部卒。男爵中村貫之（かんし、東京帝大法科卒）が横浜正金銀行で父久朗の同僚であることもあって中村家の要請を受け同家の婿養子として娘妙子と結婚。不二音響工業など音響関係の会社社長を歴任する。長女久美子は元総理大臣橋本龍太郎夫人